

イテイヴツタカ(如是語經)の考察

石 黒 彌 致

- 一 序
- 二 本經の成立
- 三 漢巴對照
- 四 本經の解剖

一 序

會て Pali Text Society 版の *Iṭṭhaka* を讀んだ折の感想を誌して置いたところ、後に至つて故渡邊海旭先生に既に同様の御研究⁽²⁾あるを知つたので、早速讀むに及んで、漢巴對照の觀點に於て多少の相違を見出した。そこで先きの感想を序文とし、巴利

イテイヴツタカ(如是語經)の考察

文の拙譯を本文として、昭和四、五年の頃先生の高覽に供した。其後拜眉の節、先生は國譯一切經に「僕が漢文の本事經を和譯し、君の巴利文の和譯と對照して發表する心算で目下翻譯中だ」とのことを語られた。然し先生は突如昨年冬、思ひがけなくも、春をも待たで遷化され、先生の御計畫はそのまゝとなつた。某氏の話によれば漢譯本事經の和譯は七分通り出來てをられたと云ふ、はからずも先生の圓寂となつて了つたわけである。予の原稿も先生の圓寂と共何處へ行つたか遂に行方不明になつて了つた。予の唯一の待望は國譯一切經に先生の御遺志を繼いで同經を和譯さるゝ方が必ず漢巴を對照して予の蒙を啓發して下さる事と、そのみに懸つてゐた。然るに今春出版された該經を見るに何故か巴利の對照はされてゐない。何かしら淡い淋しさを覺えた。そこで予は拙いながらも當時の覺え書きを引き寫して先生の御靈に獻ぐることにした、勿論改めて今、巴利

第二一卷 五八九

文を読みなほしたら、相當に杜撰な箇所が出ると思ふが、目下は多忙でその閑がない。何れ後日稿を改めるものとして、今は舊稿をそのまま發表するに止める。

1 Iiyuttak, Ed. by Ernst Windisch, 1889.

2 Journal of the Pali Text Society, 1906-1907, p. 44 f.

二 本經の成立

(イ)王舎城の結集

佛滅三ヶ月を経て王舎城の七葉窟に於て、大迦葉を上座として律を優波利、經を阿難に諮問し、これを大衆が等誦したと云ふのが所謂第一結集であるが、此の時誦出した經典の内容は判然しない。巴利律藏の所傳によれば長部の梵動經と沙門果經の二經を例として掲げ同様に五部を誦したと云ふだけである。

若し此の五部が今傳ふる所の長、中、相應、増支、小の五部とせば、小部に屬する小誦以下の十五經中

に存する本經も此の時結集された譯になるが、これは尙學界の疑問となつてゐる點で定説がない。第一結集に對する巴利律傳の記事が既に傳説化してゐるので、之れをそのまま信ずるわけには行かない。島史の記事によれば此の時九分經 (Navaṅga) を結集したと云ひ、Sutta (經)・Geyya (應頌)・Veyyakarāṇa (解釋)・Gāthā (偈)・Udana (感興)・Itivuttaka (如是語)・Jātaka (本生)・Abbhuta (未曾有)・Vedalla (方廣) の名を列擧し、且つ Agamapiṭaka (阿含藏)として Vagga (品)・Paṭiśasaka (五〇)・Sanyutta (相應)・Nipāta (集) を指してゐる。これは長、中、相應、増支の編目を示したものであるが故に阿含藏としては四部を擧ぐることになる。南傳に於て既に律と島史が是の如く説を異にして定まらぬ。併し既に宇井博士も論ぜられた如く律傳よりも島史の記事の方が史實に近いかに思はれる。何となれば經典成立の順序は先づ九分經を第一に推すべ

きて、經典の内容より察するも、長、中、相應、増支部のごときは各種の經典を排列集成せる龐大なもので、斯るものが最初より出来るものでなく、包含された箇々の經典の内容に就ても、九分經の箇々のものに比較すると餘程、増廣修飾された點があり、概して素朴な處が失はれてゐる。

1 *Collaraga*, XI, 1, 8

2 *Childers dict.* p. 507.

3 *Oldenberg*, H., ed. & tr. *Dharmacatya* IV, 14-16 (p. 31)

4 印度哲學研究(二)原始佛教教義論

(二)阿育王の刻文

阿育王の勅諭の中、ラジプタナ州バーイラートの附近に存する小磨崖に七部の經典名を刻してゐる。即ち次の如くである。

Imāni bhante dhammapaliyāni viayasamu-
kasealiyavasāni anāgātibhāyāni munigāthā mone-
yasūte upatisāpasīne e ca lāghulovāde musāvādan-
adhigeyya bhagavatā Buddhena bhāsīte. (Woolner,

イティウッタカ(如是語經)の考察

A. C. Asoka text & glossary, pt. 1, p. 34)

「諸大徳、これらの法門、毘奈耶に於ける最勝〔法説〕聖種〔經〕當來怖畏〔經〕牟尼偈 寂默行經、優波序沙問〔經〕及びかの妄語に關して薄伽梵佛陀の説き給ひし説羅臘羅〔經〕これなり。」(宇井博士著、印度哲學研究(四)頁三二四—二五)。

この中第五の *Moneyastie* (寂默行經)とあるは如是語經の第六七經、増支部三・一一〇 (A. N. pt. 1, p. 273) 及び經集三・一一 *Nalakaṣānta* (Sutta nīp. pt. 1, pp. 131—34) 等を意味するものであると云ふ⁽¹⁾。史實としては之れが或は最初であらうが、單にこれのみでは如是語經が當時存在したと云ふ證據にはならぬ。これらの經の内容は寂默行を説く點に於ては共通するも、三經各別である。併し、經の結構より見る時は如是語經が最も素朴であつて、増上部經では更に解説を加へてゐる。後にも説くが、如是語經は既に定まつた文章の結構に依つたもので、散在し

てゐた諸説を集成してゐるため、各經共通のものが多々ある。従つてその一經のみを出して全經を推すのは危険である。故に此の刻文では、如是語經の存在は決定されないが、この中に含まれた様な經説は紀元前三世紀の中葉既に知られてゐたのであらう。

1 David, F. W. *Rhys. Buddhism*. 25 thousands. p. 223.
Smith, Vincent A. *Asoka, the Buddhist Emperor of India*. 2. ed. p. 154.

宇井博士著印度哲學研究(四)頁三二五—二六註

(一) Milindapañha の記事

西紀前一四〇年頃より一一五年乃至一一〇年頃の間統治されたギリシヤ王メナンドロスと佛僧ナーガセーナの問答なる此の經³⁾中屢々九分經の語があり、其の中に如是語の文字が出て来る。これを勘へると當時既に如是語經が存在した事を推察するに難くない。同經中には既に三藏の成立を認めて、經師(Suttantika) 律師(Venayika) 論師(Abhidhammika)を擧げ、本生、長、中、相應、増支、小部の説教師

其他を法城(Dhamma-nagara)に住する者として數へてゐる。然し該經に掲ぐる記事を、總て西紀前二世紀後半のものと信ずる人はあるまい。これは後代に於て、餘程附加増廣されたものである事は、同經を通讀したもの、誰れしも考へるところであらう。然し同經の出來た時、既に九分經の存在したことは、比較的古いと思はれる問答の中に、九分經所載の記事のあるのをもちつても史實に近いとなし得よう。リス・ズヴィツ氏⁸⁾は、同經翻譯序に於て、同經教説の大典を擧げてゐるが其の中に如是語經は掲げてゐない。それによると、本經の教説は含まれて居ないと見える。然し予の見た所では、一字一句加減せざる文章はないが、如是語經と同義の箇所はないでもない。即ちトレンクナーの原本頁二二三にある世尊の言葉、

Uttihān a-pparamajjeyya, udare saṃyato siyā ti
「つとめて放逸なる勿れ、胃を節制すべし」

とあるは如是語經第二八と同義である。

「比丘衆よ、二法によりて具備されたる比丘は現法中に於て苦に住し憂ひを懷き、絶望を有し、焦惱を懷き、身壞して死後は惡趣期と爲すべし。二によりてとは何ぞ。諸根に於ける戸を守らざるにより、及び食物に無節制なるによるなり (Indriyasu agutiadvatāṭya ca bhōjane amatahīnūṭya ca.) 云々」

六根の無統制と節食を説く點は兩者類似する。更に
原本頁三七三の舍利弗の偈、

Sace me upanāmenti yathāladāhan tapassino,
sabbesaṃ viḍḍhājitvāna tato bhūṭjāmi bhō-
janaṃ ti. 「説し我れ、修行者の施されしこと施されなば、一切に分ち與へてより我は飯を食まふ。」

とあるは、同じく第二六經の意を顯はしたものと
思ふことが出来る。

イティウツタカ(如是語經)の考察

「比丘衆よ、是の如く、説し衆生、布施分配の結果を我れ知る如く知らば、與へずして食することなく、且つ吝嗇の汚れを彼の心に懷くことなからむ。假令、彼の最後の一片、最後の一口たりとも、若し受く可き者あらば分ち與へずして食することなけむ。云々」

これによつて那先比丘が如是語所説の片鱗を知つてゐたものとなし得ると思ふ。以上は阿育王の刻文に次ぐ史料と見ることが出来る。

1 cf. Trenkner, V, ed. Milindapañho, pp. 21, 161, 263, 341, 348-49, 372.

2 cf. Ibid. pp. 341-42.

3 cf. S. B. E., Vol. 35, xxvii. f.

(二) Buddhagoṣa の説

西紀五世紀の初め錫蘭のアヌラドハプラの大精舎に於て、一切經の註釋を作製せりとなすブッドヘゴ(一サ(覺音)の諸著作の中に九分經の説明がある。この中如是語經について次の如く云ふ。

第二一巻

五九三

Vuttam I'etam Bhagavatā'ū adinaya-ppavattā
 dvādasutaresasuttanta sutanta I'iyutakan
 ti veditabbam. (Samantapāsādikā, Vol. I, p. 28)

「實に是の如く世尊は説き給へり」等によりて
 始される一二二經はイティウツタカなりと知るべ
 し。

右の問題となるのは經の數量である。一二二經
 は現今傳ふるものと同數で、一方に於て覺音時代に
 は最早今時の形態をなせるものと推測することも出
 来るが、他方に於て同人の著作中に數量の相違する
 のは解釋に苦しむ。即ち前記の Samantapāsādikā に
 は dvādasutaresasuttanta (一二二經) とあるも、
 Sūmaṅgalavīṭṭhī (Vol. I, p. 24) ; Paṇḍitaśūdhāri
 (Siamese ed. II, p. 141.) ; Manorahapūṭṭharāṇi (Siamese
 ed. II, p. 329) Athasālini (p. 26) 等は dasuttar-
 asatāṇi suttantā (一一〇經) となつてゐる。是等の
 書が世に傳ふる如く皆な覺音の著述とすれば矛盾が

生ずる。予は覺音の著述に關しては、多少の意見も懷
 してゐるが、後日論ずる機會を待つ。目下の問題は
 一一〇と一二二である。單にこれを一一〇經とせる
 は一一〇の一一〇 (dasa) の前に二經の二 (dva) を附す
 べきを脱したものと解釋出來ないこともない。然し
 それにしては、他に異つた書四本皆な一樣に脱した
 ものと考へて良いか、これは疑難の點である。殊に
 一二となすサマムタパ、イサデーカの異本三種には、
 一一〇經とあることを巴利原文の脚註に於て長井博
 士は擧げてをられる。試みに暹羅版の同本卷一頁二
 七を開いて見るに「同じく一一〇經とある。更に又イ
 テウツタカの巴利原文に於ても Rhys Davids の Win-
 disch 兩氏の所有本には結尾に「イティウツタカに於
 て一二二經なり」(I'iyutake dvādasasūthikasatāṇi
 suttan ti.) とある中の一 (dva) の字を缺くとある
 (Windisch, ed. I'iyutaka, p. 124, note 10)。今こ
 れらを勘へると、過去に於て既に一一〇經と一一

二經との兩者が存在したのではないかと思ふ。而してそれは經典の組み合せの相違から數量の差を生じたものであらう。即ち第二九經及び第三〇經、或は第六四經及び第六五經の如き、其他合説し得べきものが多々あるをもつて、之れは開合の相違ではあるまいかと思ふ。

(ホ) 九分經中本經の位置

スッタ(經)、ゲヤ(應頌)、エヤーカーラナ(解釋)、ガート(偈)、ウダーナ(感興)、イテイヴッタカ(如是語)、ジャータカ(本生)、アツブタド・ムマ(未曾有法)、エーダラ(方廣)の順序をもつて古來より知られてをり、これが如何なるものなりやは、古くは覺音が當時の經藏の中よりこれに相當する經典を示してゐる。併し、これは餘り諸經を九分經中に包含せしめんとした形跡歴然たるものがあり、寧ろ九分をれゝの名稱の經あるものは、これを取るに止めた方が、或は真に近からんと考へられる。宇井博士は

イテイヴッタカ(如是語經)の考察

現存巴利經典中これに相應するものとして次の如く擧げてをられる。¹⁾

(1) スッタ、經集の前四品、(2) ゲヤ、相應部の有偈品。(3) エヤーカーラナ、相應部因緣品の第一編

第一品——第八品。(4) ガート、經集の後一品。

(5) ウダーナ。(6) イテイヴッタカ。(7) ジャータカ(八種)。(8) アツブタド・ムマ、増支部第四・一二七

——一三〇經、第八・一九——二三經、及び中部第九、

一二三經等の如きもの。(9) エーダラ、中部第九、

二一、四三、四四、一〇九、一一〇經及び長部第二

一經の七經。

椎尾先生²⁾は佛陀入滅後の佛陀觀の變遷を基として九分經を分類し、前四經 (1) スッタ——(4) ガート、(1) は後五經 (5) ウダーナ——(9) エーダラ に次ぐ成立なりと推論され、宇井博士は (4) (1) (2) (6) (5) (3) (9) (7) (8) ならんとの大體を擧げてをられる。椎尾先生は法句經の編纂を疑問の中に置く。何故に九分經中に數

へざりしか、勿論覺音論師は(4)ガートへの中に數ふるも之れを信ぜず、九分各經中に散在する所より見れば、九分經編纂以前既に編纂されたものか或は法句經ならざる法句の存在するものと見て九分の後になると見るか、古典の一たる此の經に關して宿題を存してをられた。

九分經に關しては前二博士の外に、林屋教授⁽³⁾も「十二部經の研究」と題して多々論じてをらるゝから、第六イティヴッタカに就てのみ叙べる。該經の成立を宇井博士は(4)ガートへ、(1)スッタ、(2)ゲヤに亞ぐものと見るに對し、椎尾先生は(5)ウダーナを最初に誦出されたものと見て之れに亞ぐ編纂なりとされた。勿論⁽⁶⁾これらは大體論であらうが、予は(6)イティヴッタカの中の經説には相當古い分子の存するを見るので、必ずしも順位をもつて定め得るものでな⁽⁷⁾と思ふ。何となれば、曾てウダーナを全譯して見た折も新古の分子の錯綜してゐるのを感じ、現存の形で

は到底成立順位は定め得ないと感じたのであつた。本經も現今の一二〇經中、他經より竄入せるものと、他經へ竄入せるものがあつて早急には決せられない。然し現形のみを以て論ずるときは、宇井博士の云はるゝ如く法數順に編纂せられてゐる點は、確かに後代の成立を思はせられる。文章の構成が既に一種の型に嵌まつてゐて、假令文章は素朴であつても、相當に整理された跡が見える。故に大體論としては宇井博士説位が至極穩當であらう。

1 印度哲學研究(二)原始佛敎資料論

2 人間の宗教一八九頁以下參照

3 宗教研究新五の一、三、六

(一)法數排列諸經瞥見

四部四阿含の中、法數排列の諸經は(一)長部第三四 Saṅgīti S. (D. N., vol. 3, p. 207 f.) 漢譯は長阿八、衆集經(大正藏卷一、頁四九)、別譯、大集法門經(同、頁二二六)。(二)長部第三四 Dasuttara S.

(Ibid. p. 272) 漢譯は長阿九、十上經(同上頁五二)、別譯、長阿含十報法經(同、頁二三三)、長阿九、增一經(同、頁五七)、長阿一〇、三聚經(同、頁五九)。(三)増支部、漢譯は増一阿含(同卷二、頁五四九)別譯七處三觀經(同、頁八七五)及び九橫經(同、頁八八三)等である。

右の中、増支部、増一阿含經及びその別譯を除く他經は、全部一法より一〇法に至る増一的法數の單なる羅列である。増支部及び漢譯増一阿含等は法數の説明が附隨してゐる。これらの内、何れが成立として早さかを決するは困難なるも、長部及その漢譯諸經の方が増支、増阿よりも古きことは、其の文章の簡明なるによつても知られる。増支部と漢譯増一阿含とに就ては大體、行文に於ては巴利の方が潤飾の點少く古形を持してゐると思ふが、現在の漢譯のテキストが存在せず、假令一部巴利の増支部と類似を見るも、之れによつて原本が巴利語と定め得ない點

も多々あつて、各經各別の錯簡を見るので、一概に新古は査定し難い。更に増支部と如是語經とは別項に示す通り、共通法數を説く所が二〇經もあつて、單にこれのみを比べるときは、前者の方が古いと思はれる場合もあるが、然し經全體の形としては後者の方が早い成立であることは疑ないであらう、法數に於ても如是語經は四法までしか集めてないが、増支部は一一法まで集めてゐる。

三 漢巴對照

(イ)對照表

巴利のイティヴッタカは四集に分れ、一集が三品二七經、二集が二品二二經、三集が五品五〇經、四集が一品一三經を含み、總計一一二經より成つてゐる。漢譯の本事經は三法品に分れ、一法品が二卷六〇經、二法品が三卷五〇經、三法品が二卷二八經を含み、總計一三八經より成る。今これを細別すれば、

次の如くである。

集品	經	序数	表	
			法品	經
I, 1	10	1-10	I, 1	54
" 2	10	11-20	" 2	26
" 3	7	21-27	II, 1	19*
II, 1	10	28-37	" 2	17
" 2	12	38-49	" 3	14
III, 1	10	50-59	III, 1	13
2	10	60-69	" 2	15
3	10	70-79		
4	10	80-89		
5	10	90-99		
IV, 1	13	100-112		

※校正後序中の一經を含む。

右の如く巴利は法數四までを説くも、漢譯は三までである。而して次に示すごとく、巴利の四集に對する相當經典は漢譯中に見出されなす。更に巴利の集(iṭṭhas)の分け方と漢の法品の分け方とも一致しなす。前者の三とするものを後者が二とし、後者の三とするものを前者が二とする場合もある。その個

々に就ては先生が會て J. P. T. S., 1906-07, p. 44 f. に發表された。その節、巴利は集と品とに分けて序數を示し、漢は法品に分けて序數を附されたが、予は便宜上 Windisch 氏にならひ、巴利も漢譯も共に通し番號を附して對照することとした。

巴	漢	巴	漢	巴	漢
1-3	18-15	4	18	5	16
6	23	7	47	8	11
9-10	35-36	11	37	12	(45)
13	38	14-15	1-2	16	50
17	49	18-19	9-10	20	4
21	5	22	—	23	12
24	3	25	54	26	51
27	48	28-29	61-62	30-31	69-70
32-33	67-63	34	82	35	(63-64)
36	73	37	—	38	74
39	76	40	90	41	99
42	85	43	84	44	(104)
45	81	46	(—)	47	—
48	83	49	108	50-58	79
59	(93)	60	(—)	—	(73)
63	121	63-64	134	61	80
	130	(63)	69-70	65	—
		(64-65)	(89-70)	(—)	130

66-69	—	70-73	—	74	124
75	—	76	132	77	—
78	111	79	137	80	138
81	—	82	137	83	—
84	136	85	132	86	132
87-89	—	—	—	91-94	—
(87)	(100-101)	90	135	(91)	(92)
(88-89)	(—)	—	—	(92-94)	(—)
95	114	96	—	97	130
98	97	99	—	100-112	—

右の表の中、括弧内の數字は予の考へであつて、漢巴對照の結果、先生と相違を生じたる點である。

(ロ) 渡邊先生との相違點

(1) 巴利第八經を、先生は漢譯第一一經に配當されたが、予はこれを第四五經該當とする。第一一は我慢を説き、第四五は慢を説き、後者は用語に於ても行文に於ても略ぼ巴利との類似を見る。

苾芻當知、若有於慢未如實知……未能永斷彼於
 自心未離慢故、不能通達、不能遍知……若有於
 慢已如實知……彼於自心已離慢故、即能通達、

即能遍知……

(巴)「比丘衆よ、慢に未だ通達せず (anabhijñanam) 未だ遍知せず (aparīṇanam) 心に未だ厭はず未だ捨てずんば苦滅は不可能なり。されど比丘衆よ、慢に已に通達し、已に遍知し、心に已に厭ひ、已に捨離せば苦滅は可能なり」……。

(2) 巴利第三〇—三二經及び第六四—六五經に漢の第六九—七〇經をあてられた。此の漢譯は三善行と三惡行とを説いたもので、これは正しく巴利の第六四—六五經に該當するものである。寧ろ巴利の第三〇—三二經は、行文必ずしも一致しないが、第六三—六四經に配すべきであらう。次にその要文を示す。

苾芻當知、有二種法、能生焦惱、云何爲二、謂
 有一類補特伽羅、唯造衆惡、唯作凶狂、唯起雜
 穢、不修衆善、不習調柔、不救怖畏……彼由唯
 造衆惡等故、心生焦惱……

(巴)「比丘衆よ、我に焦惱 (*tapantya*) の二つの法あり、二つとは何ぞ、比丘衆よ、こゝに或者は正眞を作さず、善を作さず、怖畏を懷かず、惡を作り頑固を行ひ罪を造るなり。彼は自から正眞を爲さざりしによりても焦惱され、自から惡を作りしによりても亦焦惱さる。されば比丘衆よ、そは焦惱の二つの法なり」……

漢巴行文一致せざるも不作善 (*akatakusala*) 作惡 (*katappa*) の二法を説く點は同一である。

先生が此の巴利を漢譯の第六九經に該當すると見られたのは、或は巴利の偈を見て早計されたのではあるまいか。

<i>kāyaḍḍacaritaṃ katvā</i>	身惡行をなし
<i>vacīḍḍacaritaṃ vā</i>	口は語惡行
<i>manoduccaritaṃ katvā</i>	意惡行をなし
<i>yakkhaṇaṃ dōsasaññitaṃ</i>	他の惡とし言はるゝものを「なし」
<i>akavā kusalaṃ kammaṃ</i>	善業をならず
<i>kaṭvānakusalaṃ bahun</i>	もまた不善をなし

kāyassa bheda dappāṇi 若ろかしき身は壞し
nirayaṃ so uppijāti そは奈落に生るゝなり。

右の偈は、巴利の第六四經に掲ぐるものと同一であつて、同一偈文が第三〇經と第六四經とに出づるをもつて錯語を生じ易いが、これこそ漢譯第六九經の偈と全く一致するものである。即ち、

諸有愚癡人、作三種惡行、不作妙行、

引餘過令生、彼臨命終時、決定有愛悔、

死墮諸惡趣、生於地獄中。

故に巴利の第三〇經は、漢譯の第六三經にあつべきものである。

(3) 巴利第三一經は前經の反對である作善 (*kāyākusala*) 不作惡 (*akatappa*) を説いたもので、漢譯に於ても第六四經に充當すべきものである。先生は第七〇經に當てられたが、前述の理由でそれは巴利の第六五經に該當するものと思ふ。

(4) 巴利第三八經を漢譯の第九九經に當てられ

た。予はむしろ第一〇四經に近しと思ふ。何となれば、第九九經は非理作意によつて欲、恚、害の尋思の起ることを説いたもので、巴利の第三八經は不殺 (abyabajiha) と安穩 (khema) 孤獨 (pavivaka) の

尋思を起すものであるとして説いてゐる。漢の第一〇四經は能感短壽之行と能感長壽之行とを説き、前者は常樂殺生で、後者は遠離殺生であるとす、巴共に行文不一致で單に主旨に於て共通點を見るに過ぎなす。

(5) 巴利第四三經と漢譯第八四經とを相應するものとされた。併し予は此の巴利文に對する漢譯を本經の中に見出すことは出来なかつた。巴利は無生 (ajata) 無有 (abhuta) 無作 (akata) 無爲 (asatta-tata) 及びその反對とを説き、漢譯第八四經は聖尋求と非聖尋求の二種及びその果報とを説き、二者些の共通點をも見ない。

(6) 巴利第四四經を漢譯の第七九經とされたが、

イティウツタカ(如是語經)の考索

これは明に第七八經の誤植であらう。何となれば第七九經は有見、無有見の二纏を説くも、第七八經は有餘依、無餘依の二種の涅槃界を説き、巴利の所説と一致する。

(7) 巴利第四八經を漢譯第八三經に該當するものとされたが、之れ亦予は反對である。何となれば巴利は地獄に墮する者として「非梵行を梵行と混同する者、及び完き極清淨なる梵行を修せる者を、無根なる非梵行もて誹謗せしむる者」を説いてゐる。漢譯は靜慮と聽説の二種を正作すべしと説き、巴利の如き文意はない。むしろ予は第九三經に相當するものと思ふ。即ち漢譯に、

「苾芻當知、世有二種補特伽羅、攝受增益惡趣地獄惡不善法、云何二種補特伽羅、一者一類補特伽羅毀犯淨戒、實非沙門自稱沙門、實非梵行、自稱梵行、……如是二種補特伽羅、攝受增益惡趣地獄惡不善法……」

Dve-me bhikkhave apāyika nerayika idam-
 appa-hāya. Katame dve? Yo abrahmacari
 brahmacari pehīṇo, yo ca paripuṇṇaṃ pari-
 suddhaṃ brahma-cariyaṃ carantaṃ amūla-
 kena abrahmacariyena anuddhaseṭṭi. Ime
 kho bhikkhave dve apāyika nerayika idam-
 appahāya-ti. (比丘衆よ、茲に、そを捨てずし
 て悪生、奈落に墮する二者あり。二者とは誰
 ど、非梵行を梵行と混同する者及び完全極清淨
 なる梵行を修せる者を無根の非梵行もて誹謗す
 る者なり。比丘衆よ、この二者はそを捨てずし
 て悪生、奈落に墮する者なり、と。)

偈頌は漢巴不一致であつて、巴利の第三首は第九
 一經に再出し、これは漢譯第九二經と合致する。

(8) 巴利第四九經は漢譯第一〇八經とされたが、
 予は正しく該當する經典を見ない。第一〇八經は雜
 染と清淨との二法を説き、巴利が二見を懷く天と人

と懷かざる具眼者のことを説くのと一致しない。寧
 ろ次の第一〇九經が有見、無有見に對して正慧をも
 つて如實に了知する有智見を説くに似てゐる。併し
 所論、用語共に一致せず、該當經典となすを得ない。

(9) 巴利第六三—六四經を漢譯の第六九—七〇
 經と對應されたが、巴利第六三—六四經は第六四—
 六五經の錯誤であらう。何となれば第六四經は三惡
 行を説き、第六五經は三妙行を説くをもつて正しく
 漢譯第六九—七〇經に相當する。然るに巴利の第六
 三經は過、現、未の三時を説いたもので、これに該
 當する漢譯は見出し得ない。

(10) 巴利第六五經を漢の第一二〇經(三品第一〇)
 に配當してをられるが、これは前項の誤記から生じ
 た誤りであらう。即ち前に第六四—六五經とすべき
 を第六三—六四經としたため、第六五經の三妙行を
 別出して漢の第七〇經(二品第一〇)に配されたも
 のと思ふ。然るに、その第七〇經は先生の數へ方に

よつて三品の第一〇(予の第二二〇)とあるも、これ亦二品の第一〇(予の第七〇)とせねばならぬ。恐らく之れは誤植であらう。何となれば後者は三妙行を説くも、前者は善戒、善法、善慧の具調を説き、巴利第九七經と相應すべきもので、第六五經とは何等關係がない。

(11) 巴利第八六經を漢の第一二五經と對比せられた。併し内容を精査すると、兩者單に正法に就て論ずる點は同様であるが、文脈が一致せず、僅に漢譯偈文の初めの四句が巴利偈の前句に類似するのみである。

尊重法樂法、欣法樂法行、於法常隨念、
能不退正法、

Dhammāraṃo dhammarato	法を樂しみ法を欣び
dhammāṃ anuvicintayaṃ	法を隨念し
dhammāṃ anussaraṃ bhikkhu	法をかへりみし比丘は
saddhammā na parhāyati	正法を捨てじ。

(12) 巴利第八七—八九經は漢譯になしとされた。

イティウッタカ(如是語經)の考察

予の見たる限りでも全同すべき經はなかつたが、然し同一法句を説くものはある。それは漢譯第一〇〇經と第一〇一經とを合したものである。即ち漢の第一〇〇に非理作意、起欲尋思、起恚尋思、起害尋思とあり、第一〇一經に如理作意、出離尋思、無恚尋思、無害尋思とあるは巴利第八七經に kama-viatta (欲尋思) vyāpāda-viatta (恚尋思) vihiṃsa-viatta (害尋思) nekkhama-viatta (出離尋思) ayyāpāda-viatta (無恚尋思) avihimsa-viatta (無害尋思) とあるものと同一である、然し行文に至つては少しも類似しなす。

(13) 巴利第九一—九四經は漢譯に相當經なしとされた。なれど予の見たる限り、その中の第九一經のみは漢譯第九二經に該當するものと思ふ。漢譯中の沙門と梵行のことは次の第九二經に別説せるもので、巴利文には前述の第四八經に擧ぐるも此處には掲げてゐない。次に漢巴を比較しよう。

「苾芻當知、有二苦事最爲難忍、一剃鬚髮、二常乞求。所以者何。世間怨嫌與呪詛者作是願云、願彼貧窮剃除鬚髮、服故弊衣、手持瓦器、從家至家、行乞自活、諸有淨信善男子等受持此法、而出家者、非爲王賊債主怖畏之所逼切、非恐不活、而捨居家、但爲超度生死病死愁歎憂苦熱惱等法、但……又如育木、兩頭火燃、中塗糞穢、若在聚落及與空閑、皆無復用、我說如是癡出家人亦復如是、失在家法、復非沙門……。

出家而破戒 二俱無所成 謂失在家儀
及壞沙門法 寧吞熱鐵丸 洋銅而灌口
不受人信施 而毀犯尸羅 諸毀犯尸羅
無悔無敷愧 多受人信施 定當生地獄
諸有智慧人 應堅持淨戒 勿受人信施
而毀犯尸羅

Antam-idaṃ bhikkhava jivikānaṃ yad-idaṃ
piṇḍolaṃ, abhiṅgaṃ bhikkhava lokasmiṃ

piṇḍolo vicarasi pattaṇṇi. Taṃca kho etaṃ
bhikkhava kulaputta upeti atthavasika attha-
vasaṃ paṭicca, neva rājābhinṭa na corābhinṭa
na inatṭha na bhayaṭṭha na ajivikā pakāla.
Api ca kho oṭṭhamaṇa jattiya jāṭya maraṇena
sokehi parivevehi dukkhehi domanassehi up-
āyākehi dukkhabhikīṇa dukkhaparētā, appeva
nāma inassa kevalassa dukkhakkhandhassa
antakiriya paññāyetha ti. Evaṃ pabbajito cāyaṃ
bhikkhava kulaputto so ca hoti abhijjhahū
kāmesu tibbasarāgo vyāpānācitto paduṭṭha-
manasankappo mutṭhasasati asaṃpaṇāno asaṃ-
hito vibbhānācitto pakāṇḍiriyō. Seyyathā pi
bhikkhava chavālatāṃ ubhato paditāṃ majjhe
gūlhaḡatāṃ neva gāme kaṭṭhatāṃ pharati na
arañṇe, tebhūpamaṇaṃ bhikkhava imaṃ pu-
ggaḡaṃ vadāmi, gihbhoga ca perihno sama-

ñāṭaṭaṭaṭa na pariṇṇeṭṭi.

Ghibhogā ca parihino

samaññāṭaṭaṭa dubbhago

paridhammasmano pakireṭṭi

chavālatāṇ va nassati

Seyyo ayogūḷo bhutto

tatto aggīsikhūpamo

yañce bhūñjeyyo dussilo

rañṭapāṇḍam asaññāto ti

「此丘衆よ、これは最後の生活即ち托鉢なり。比丘衆よ、この托鉢者は手に鉢を持って世間を遊行すとの謂なり。而して比丘衆よ、この賢しき善男子は物を求めんがために行くなり。されど曾て王に捕縛されし者にあらず、曾て盜賊に拉致されし者にあらず、負債のために「出家せる者に」あらず、怖畏のために「出家せる者に」あらず、生活を褻奪せるものに非ず。のみならず

イテイウツタカ(如是語經)の考察

ず已に陥りし生、老、死、愁、悲、苦、憂、惱の苦を服せる者、苦を滅せる者なり。されば總じて此の苦蘊の終りを知るべし。是の如く比丘衆よ、出家せる善男子にして切望あり、愛欲の強慾を有し、恚心を懷き、邪思惟を懷き放逸にして知解なく堅固ならず、惑心を懷き、自性を有するあり。譬へば比丘衆よ、火葬場の炬火にて兩端の燃えしものの真中に糞を塗りし物は聚落に於て使用の目的に添はず林間に於ても「使用の目的に添はざる」が如し。同様に比丘衆よ、我はこの者は「一方に」在家の享樂を捨て而も「他方に」沙門の義を成滿せずと説くなり」と。

「世のたのしみと沙門の義との衰ふはつれなし、「沙門の義は」失せつゝ撒らざる、焼場の炬火の捨てらるゝごと。

破戒無慚のものは國の飯を食まんより

火焰のごと灼熱せる鐵丸を食ふにしかじ」と。

(一)用語の對照

本事經の中にテキストの熟字を音譯せるものが四三種ある。これに就いて原字が梵語であつたか、或は巴利語であつたかを定むることによつて、原本の何語であつたかを決することが出来る。然しこれは本來非常に困難な問題で、シルワン・レヴィ博士等によつて漢譯佛典の或ものは直接印度の梵語から翻譯されたものでなく、一旦中央亞細亞方面に文化の移動と共に梵語、俗語、其他の佛典も輸出されて其處の方言に譯され、此處より更に支那本土へ重譯された事を實證さるゝに至つた今日、輕々に漢字を直ちに梵語と對比するのは危険であるが、予は之れを究明すべき器でないので單に梵巴の兩語のみを比較する。四三種の中、梵巴音の共通なるものを除き譯語の上に兩者の區別を認められるものが七種ある。即ち、

譯語	初出の箇所	梵語	巴利語
1 苾芻	第一經	Bhikṣu	Bhikkhu
2 毗補羅	第三經	Vaiṣṭya	Vepulla
3 補特伽羅	同	Paṭṭala	Puggala
4 毗鉢舍那	第八一經	Vipāśyana	Vipassana
5 橋陳如	第一一經	Kaundinya	Kondanna
6 拘瑟社羅	同	Kaushika	(Koffhita)
7 鉢特摩	第二二經	Padma	Paduma

先生は(3)と(6)とを例として擧げてをられる。

(6)は如是語になく、本事經のみに出づる語であるが、中阿卷七に僧伽提婆は拘絺羅と譯してゐる。

佛教普通の用語は假令巴利原典より譯されたものでも慣用語を用ひて音譯する事は常に見受けるところであるが、今、右に出せる内(1)の苾芻の如き、他の用例の如く比丘とせず常に苾芻と梵語に近い音を示し、(2)の補特伽羅の特の字をdにあてたる如き、(6)の拘瑟社羅も中阿の如く拘絺羅と巴利音より梵音に近い音を寫すごとき、(7)鉢特摩の特も頭とせざるは巴利音より梵音を出せるものと推察すること

が出来る。

以上によつて予は本事經は梵巴兩語のみをもつて推すときは原本は梵語であつたものと想像するのである。殊に本經の卷頭に「大唐三藏法師玄奘奉詔譯」とあるのに誤りなくば、同師の梵本漢譯諸典に於ける嚴密なる態度より推して、必ず本經そのまゝの梵本の存在したことを想像するに難くない。従つて本事經の梵本と巴利本のイティヴッタカの二種が印度に傳承された事が想到される。然し此の兩者の中間が原であるかは推測に苦しむ所であるが、次に少しくこれを叙べて見たいと思ふ。

(三) 成立の考察

前掲(イ)に於て示したやうに、本事經は一三八經を有し、イティヴッタカは一二二經を含むのである。法數の量より云へば増支部の一一、如是語の四、本事經の三の順となつて、本事經が最も若しことゝなり、單に尠し程早い成立と見れば、これが一番早く

成立したものと成るが、事實は然く簡單には行かない。本事經一三八經と如是語一二二經の中、相互類似するものが六四經ある。之れを精査すると、一經として長行、偈共に辭句を同じうするものなく、單に同一法數を説くに過ぎない、そして文章に於ては本事經は教説の解釋其他を載せ、如是語に比して佳麗冗長の點が多い。左に最も兩者の類似せる一例を示す。これは巴利の第一四經と漢の第一經とである。

Vuttam, hetam, bhagavatā vuttam-arāhātā ti me sutam.

善 從 世 尊、 聞 如 是 語

Nāham bhikkhava añham ekañvarānam pi samanupassāmi.

我 當 當 知 我 觀 世 間 無 別 一 法、 覆 障 障 生 隨 勝 轉 生 死 長 途

yena nīvarāpema nivūtā pajā dīgharātam sandhāvāmi

如 無 明 蓋 所 以 者 何、 世 間 雜 生、 由 無 明 蓋 所 覆 障 故、 隨 勝 轉

samsarāmi yathayidāmi bhikkhava avijjāñvarānaṃ. Avi-

生 死 長 途 (是 故 汝 益 難 知 是 學、 我 當 不 何 修 起 難 明

ñāñvarāpema hi bhikkhava nivūtā pajā dīgharātam sandha-

彼 無 明 蓋、 由 貪 愛 癡、 汝 等 亦 知、 難 知 是 學)

vāmi samsarāntīti. Ekam añham bhagavā avoca, tatthetam

iti yuccati:

Narh-añño ekadhammo pi

無 別 一 法

yeneva nīyutā pajā

覆障諸群生

sararanti ahorattam

風 流 生 死 途

yathā mohena āyutā

如無明蓋者(無明大風)由斯流轉彼此有往來異境高下趣)

Ye ca moham pahavāna

若彼無明蓋

tamokhandham pedālayun

(解脫貪愛縛)

na ta puna samparanti

不 處 生 死 流

hetu tesam na vijāti

以 無 彼 因 故

(Ayaṃ-pi attho vutto bhagavata iti me sutan-ti)

括弧の中は兩本の相逢を示すものである。兩者最も類似すると見る經に於てすら右の如く巴利文より漢譯の方が冗長である。而して漢譯の方が文章が佳

麗で潤飾が多い。これは當に玄奘の名譯によるのみでなく、原梵本が巴利本より後世のもので、本來簡潔のものが次第に附加増廣して來た發達途上にあるものではないかと思ふ。従つて法品の量に於ても假令漢は巴より一法品少くとも、纏ては長部諸經或は增文、增阿含の如く増加して行く性質のものであつて、それが何等かの理由で三法品に止つたものか、或は巴利の如く四法品まであつた梵本の最後の一法品が玄奘譯出の當時散逸してゐたのではあるまいかと想像される。何れにしても、現在の巴利本と漢譯本との對比では前者が後者よりも早し成立のものであると云ふことは云へよう。

四 本經の解剖

(一) 經の結構

本經は長行と偈頌との二部より成り、一節毎に三の語を以て結んでゐる。而して卷頭には Vuttam

hetam bhagavata vuttam arahata ti me sutam. (げ

に、これを薄伽梵によりて、説かれ阿羅漢によりて「説かれし」と我は聞けり)と始めてゐる。イティヱッタカ¹の語は結語の *hi* と冠辭の *vutta* と合して *hi-vutta-ka* (と説かれしもの) と稱するに至つたものであらう。本經は經序、本文、偈序、序文、結句の順で構成されてゐる。この中、各經相違するは本文と偈文のみで、經序、偈序、結句は共通である。斯く叙述形式が一定し同一型に嵌められ、而も一法より四法に至る増上の排列をなしてゐる。斯く一經の結構に一種の様式を具備してゐる點はかの *Udana* が長行の後に必ず *Udana* (感興語) を配してゐるとの好一對である。經序、偈序、結句は大體に於て各異本にも存するが、嚴格に云へば寫本によつては之れを缺くものもあつて、一一二經全部完備してゐるものはない。序結なきものを誤寫と見るか、或はなき經を後代の附加と見るかは疑難の點である。

イティヱッタカ(如是語經)の考察

(ロ)長行と偈頌

ウィンターニッツは其著印度文學史¹に於て、如是語の長行と偈頌は全然別個の成立であつて、後人が兩者を輯集したものであるとの假定の下にこれを論じてゐる。これは傾聽すべきことで、本經を通讀した結果、(1)長行は偈頌を基として説いたもの、(2)長行に相當せる偈頌を他經より引いて併立させたもの、(3)長行の意味が多少含まれてゐる點で、他經より引いて結合せしめたもの等に分けることが出来る。故に同一偈が各所に出て來る結果を生じたものであらう。従つて兩者の成立は長行より偈頌の方が前に置かるべきである。全く一の思想を詮す點に於て、後者よりも前者の方が調ひ過ぎて形式化してゐる。更に第一經より第六經、及び第九經より第一三經に至る偈の *Indhase*, *duffhase*, *mūjhase*, *krudhase*, *makkhase*, *matthase* の如く吠陀複數の語尾を有するものや、第三五、三六經第一偈及び第九

第二卷

六〇九

五經第三偈の *vedh* の如く古い語根を有するもの
あるによつても推察し得るのである。

右の中、(1)に屬すると思はれるものは、第一經
— 第八經、第一四經、第一六經— 第二三經、第二四
經、第二六經、第二八經、第三二經— 第三七經、第
三九經、第四一經— 第四四經、第四七經、第四九經
等。(2)に屬するもの第二五經、第四〇經、第四八
經等。(3)に屬するもの第九經— 第一三經、第一五
經、第二二經、第三〇經、第三二經、第三八經、第
四五、四六經等である。

1 cf. *Geschichte der indischen Literatur*, Bd. II, s. 68.

(二) 他經との關係

本經には巴利或は漢譯諸典に出づる長行又は偈頌
或は一法句等の存するもの尠しとしなす。その範圍
は次の如くである。

Samyutta Nikāya, § 27, 38, 39, 50, 63.

Anguttara Nikāya, § 22, 30, 31, 42, 62, 64, 65,

86, 90, 96, 98, 99, 101, 105, 107, 108-112.

Dhammapada, § 25, 45, 48, 49.

Udana, § 43, 86, 94, 97.

Puggalapaññati, § 104.

中阿含、第二二、九一、一一二經。

雜阿含、第二四、二五、四二、四五、四六、六

二、七四、九二、九九經。

增一阿含、第一一三、二〇、二二、二三、二六、

四四、九八、一〇五經。

法句經、第二五、四五、九九經。

この外法數のみ類似せるものは多々存する。右は
果してそれ〳の經典より如是語經に引用せるもの
か、或は如是語經より他經へ引用されしものかは輕
々に論斷する事は出来ない。ウインターニッツは漢譯
に缺けてゐる後分は阿含より取つたと云ふが、單に
他經にあると云ふ理由のみで竄入と片づけて了ふの
は危険である。何となれば第三〇及び三一經に該當

する A. N. II, 1, 3-4. の如き寧ろ後者の方が前者より素朴で原形的な香がする。漢譯になしたのは前項に説くが如く原本の相違であり、綜合的に見て巴利本の方が古い貌を示してゐるので、何等かの理由で梵本が缺けたものとしか思はれない。予は種々の點より見てイティヅッタカの本文は可なり古くより存してゐた教説であつて、これが散説してゐた頃、即ち、現今の經の如き結構を造らざる以前に於て、種々の經の中に取り入れられたもので、一經全部が他經に含まるゝものゝ如きは寧ろ本經成立後に取り入れられたものであらうと思ふ。

1 Jb1. Bd. II, S. 70

最後に漢巴の囉陀南 (Uddana) と本文の一句を取捨し全經の目次と他經との關係を表示する。上段のアラビア數字はイティヅッタカの經の順序を示し、下の「本」とあるは本事經の順序を示す。

20	汗	心	(Paduñña-citta)	本、四 增阿、四、一、五、 A. N. I, 5, 3.
19	僧	和	(Sangha-samaggi)	本、四 增阿、四、一、五、 A. N. I, 5, 3.
18	僧	破	(Sanghabheda)	本、四 增阿、四、一、五、 A. N. I, 5, 3.
17	同			
16	有	學	(Sekkha)	本、五 增阿、四、一、五、 A. N. I, 5, 3.
15	愛	結	(Tanha-samyjo-jana)	本、二 增阿、四、一、五、 A. N. I, 5, 3.
14	無	蓋	(Avijja-nivarana)	本、一 增阿、四、一、五、 A. N. I, 5, 3.
13	覆		(Makkha)	本、三 增阿、四、一、五、 A. N. I, 5, 3.
12	忿		(Kodha)	本、四 增阿、四、一、五、 A. N. I, 5, 3.
11	癡		(Moha)	本、三 增阿、四、一、五、 A. N. I, 5, 3.
10	一	集第二品	(Dosa)	本、三 增阿、四、一、五、 A. N. I, 5, 3.
9	食		(Lobha)	本、三 增阿、四、一、五、 A. N. I, 5, 3.
8	慢		(Mana)	本、四 增阿、四、一、五、 A. N. I, 5, 3.
7	一	切	(Sabba)	本、四 增阿、四、一、五、 A. N. I, 5, 3.
6	慢		(Mana)	本、二 增阿、四、一、五、 A. N. I, 5, 3.
5	覆		(Makkha)	本、一 增阿、四、一、五、 A. N. I, 5, 3.
4	忿		(Kodha)	本、一 增阿、四、一、五、 A. N. I, 5, 3.
3	癡		(Moha)	本、一 增阿、四、一、五、 A. N. I, 5, 3.
2	瞋		(Dosa)	本、一 增阿、四、一、五、 A. N. I, 5, 3.
1	食		(Lobha)	本、一 增阿、四、一、五、 A. N. I, 5, 3.

一集第三品

- 21 清心 (Pasanna-citta) 本^五 同^一子品六 A. N. I, 5, 4.
- 22 福 (Puñña) 中^阿三四福經 A. N. I, 5, 4.
- 23 二利 (Ubbhothe) 增^阿四^護品七
- 24 毗補羅山 (Yepulla-pabbata) 雜^阿三四(九四七) S. N. XXV. 10.
- 25 知何故茶語 (Sampajāna-mussavāda) 本^五 法句經^世俗品 Dhp. 176. 中^阿三^度經 雜^阿三八(一〇七五)
- 26 布施 (Dāna) 增^阿四^護品六
- 27 慈 (Metta) 本^四八 S. N. II, 1, 9, 6.

二集第一品

- 28 根門不護 (Agutta-dvāra) 本^六一 飯食不知量 (Amatahāra)
- 29 飲食知量 (Gutta-dvāra) 本^六二 (Matahāra)
- 30 不作善 (Akata-kalyāṇa) 本^六三 (Kata-kalyāṇa)
- 31 不作惡 (Akata-pāpa) 本^六四 (Kata-pāpa)
- 32 見戒 (Pāpatti) 本^六七 (Pāpattihi)
- 33 善見戒 (Bhaddakasiḥa) 本^六八 (Bhaddakadippihi)

二集第二品

- 34 無愧 (Anāstāpī) 本^八二 (Anokāpī)
- 35 梵行 (Brahmacariya) 本^七四 (Brahmacariya)
- 36 同梵行 (Samvejāna) 本^七三 (Yoniso padhāna) ナシ
- 37 正動 (Samvejāna) ナシ
- 38 孤安 (Kheṇa) 本^{一〇}四 (Pavivēka)
- 39 惡應 (Pāpaṇ, passatāna) 本^七六 (Ahirikā, Virājakāna)
- 40 無愧 (Anokāpa) 本^九〇 (Parihina)
- 41 不滅 (Aparihina) ナシ (Aparihina)
- 42 愧慚 (Hiri) 本^八五 (Okappa) 雜^阿四七(三四三) 增^阿九^輔品一 A. N. II, 1, 9.
- 43 無生 (Ajāta & c.) Udana. VIII, 3.
- 44 有餘涅槃 (Sampādisesa nibbānadhātu) 本^七八 (Anupādisesa)
- 45 樂閑處 (Patisaḷḷanārāma) 本^八一 雜^阿二九(八二五) Dhp. § 32.
- 46 學勝 (Sikkhānisamsā) 本^八九 雜^阿二九(八二四)
- 47 覺悟 (Jāgara) 本^八〇
- 48 地獄 (Aparāya) 本^九三 中^阿三^度經 法句經^地獄品 Dhp. § 306-08.

49	見	(Dīṭṭhī)	ナシ
三集第一品			
50	不善根	(Akusalamūla)	本、ナシ 雜阿、三八(一〇六五) S. N. III, 1, 2, 5. Ibid. 3, 3, 6.
51	界	(Dhātu)	本、ナシ 中阿、四八、多界經(參) 雜阿、一七、(四六)
52	受	(Vedana)	本、ナシ 雜阿、二八(四五九) cf. S. N. XLV, 29 & 169
53	同		本、ナシ
54	水	(Īsana)	本、ナシ 十地經論 cf. S. N. XL V, 161
55	同		本、ナシ
56	漏	(Āsava)	本、ナシ 中阿、七、大捨羅經(參) cf. S. N. XL V, 161
57	同		本、ナシ
58	愛	(Tanhā)	本、ナシ 長阿、八、衆集經(參)
59	無學	(Asekha)	本、一、二一
三集第二品			
60	福業事	(Puññakiriyava-ttha)	本、一、三四 增阿、二、三、寶品(參)
61	眼	(Cakkhu)	本、ナシ 長阿、八、衆集經(參) 智度論三三(參)
62	根	(Indriya)	本、一、三〇(四一) 雜阿、二六、(四一) A. N., III, 84
63	時	(Addha)	本、ナシ 雜阿、三八(一〇七八) 中阿、四七、多界經(參) 增阿、九、三、寶品 S. N. I, 1, 2, 18.
64	惡行	(Duccarita)	本、六、九 A. N., II, 1, 3. 增阿、二、三、寶品
65	妙行	(Succarita)	本、七〇 A. N., II, 1, 4
66	淨	(Soceyya)	本、ナシ cf. A. N. III, 118, 119.
67	寂	(Moneyya)	本、ナシ c. Ibid. III, 120.
68	食	(Rāga & c.)	本、ナシ
69	同		ナシ
三集第三品			
70	惡行	(Duccarita)	ナシ
71	妙行	(Succarita)	ナシ
72	出離	(Nissaraṇiya-dhātu)	本、ナシ 本、ナシ 大毘婆沙論二九(參) S. N., V, 4, 5.
73	色	(Rūpa & c.)	本、ナシ
74	諸子	(Putta)	本、一、三四 雜阿、三、(七四)
75	諸人	(Puggala)	ナシ
76	樂	(Sukha)	本、一、三三
77	身	(Kāya & c.)	ナシ
78	諸有情	(Sattā)	本、一、一一
79	諸法	(Dhammā)	本、一、二七

イタイウツタカ(如是語經)の考察

三集第四品

- 80 不善尋思 (Akusala-viññāna) 本 一 二 六
 - 81 地獄 (Apāra) ナン
 - 82 天音 (Devasadda) 本 一 三 七
 - 83 天人(五衰) (Dera) 本 ナン
增阿二六、等見品三
 - 84 三人 (Tayo-puggala) 本 一 三 六
 - 85 不淨觀等 (Asubhānupassī & c.) 本 一 三 三
 - 86 法 (Dhamma) 本 ナン
A. N., IV, 11.
 - 87 尋思 (Viññāka) 本 一 〇 〇 一 〇 (參)
增阿二六、等見品三
cf. A. N., III, 123.
 - 88 貪等 (Lobha & c.) ナン
 - 89 提婆達多 (Devadatta) ナン
- 三集第五品
- 90 勝信心 (Aḅḅappasāda) 本 一 三 五
A. N., IV, 94; V, 32, 3.
增阿二、廣演品(參)
 - 91 托鉢者 (Phīḍola) 本 ナン
增阿二、廣演品(參)
雜阿一〇〇(一、二、三)
S. N., XX, 80, 18-19.
 - 92 僧伽梨 (Sanghāḍi) ナン
 - 93 火 (Aḅḅī) ナン
 - 94 決定 (Upparikkha) ナン
 - 95 欲生 (Kāmappatti) 本 一 一 四
 - 96 欲繫 (Kāma-yoga) 本 ナン
增阿二、廣演品(參)
A. N., IV, 10, 3.
 - 97 善戒等 (Kalyāṇasīla & c.) 本 一 一 〇

98 施等 (Dāna & c.)

- 98 施等 (Dāna & c.) 本 九 七
增阿七、有無咍一五
A. N., II, 13, 1 or 7 or 9.
 - 99 三明 (Tovijja) 本 ナン
A. N., III, 58, 6 & 59, 4.
S. N., VI, 1, 8, 5 & 2, 3, 12.
Dhp., 423.
雜阿四四(一、二、三、四)
法受經、廣演品
- 四集第一品
- 100 梵宿 (Brahmana) ナン
 - 101 四事 (Cattāri) 本 ナン
A. N., IV, 27.
 - 102 有義(因證) (Āsava) ナン
 - 103 沙門 (Samaṇa) ナン
(因證) (Bhikkhu)
 - 104 比丘 (Bhikkhu) ナン
(五分法身、田神(野)羅)
 - 105 起蒙 (Tāṇhuppāda) 本 ナン
增阿二、持察經
A. N., IV, 9.
 - 106 尊敬 (Pojita) 本 ナン
A. N., III, 3, & IV, 63.
 - 107 外護者 (Bahupakkāra) ナン
 - 108 欺誑等 (Kuhā & c.) 本 ナン
A. N., IV, 26
 - 109 呵(譏) (Nadi) 本 ナン
A. N., IV, 5, 2 & 3
 - 110 行(因)等 (Cāra) 本 ナン
A. N., IV, 11.
 - 111 具足戒 (Sampanna sīla) 本 ナン
A. N., IV, 12
 - 112 如來 (Tathāgata) 本 ナン
增阿二、持察經
A. N., IV, 23.
(增阿二、三、一〇(轉記))